柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第105号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
「川崎の文化財」

橘樹官衙遺跡群［たちばなかんがいせきぐん］（５）
===影向寺と地下に眠る白鳳寺院跡（影向寺遺跡）===

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員　栗田　一生

以前お話ししたように、国史跡橘樹官衙遺跡群は、高津区千年と宮前区野川に所在し、橘樹郡に置かれた役所跡である「橘樹郡衙跡」とその西側に隣接して造営された古代寺院跡である「影向寺遺跡」から構成されています。これまでの発掘調査成果から、「古代地方行政機関と寺院との密接な関係性を示すとともに、地方官衙［かんが］の成立から廃絶に至る経過をたどることができる希有な遺跡群であり、その成立の背景や構造の変化の過程も判明するなど、7世紀から10世紀にかけての官衙の実態とその推移を知る上で高い歴史的価値を有している」と評価され、国史跡に指定されました。

この国史跡橘樹官衙遺跡群のうち、前回までは橘樹郡衙跡を中心にお話ししてきましたが、今回からは影向寺遺跡を取り上げてお話ししていこうと思います。影向寺遺跡は、橘樹郡衙跡の西側に隣接する高津区及び宮前区野川に所在し、現在も影向寺というお寺が存在しています。遺跡は、縄文時代から近世まで各時代にわたる遺構・遺物が発見されていますが、寺院跡が確認されている古代が、影向寺遺跡を代表する時代といえます。

影向寺遺跡から発見された寺院（以下、「影向寺」と言います。）は、これまで実施された学術調査や発掘調査の成果から、7世紀後半の創建と考えられています。この時期に創建された寺院は白鳳寺院と呼ばれていますが、影向寺は川崎市内のみならず南武蔵地域で現在確認されている唯一の白鳳寺院です。

影向寺は、これまでの調査で発見された遺構や瓦の研究から、大型の建物が建設された影向寺が創建される前の時期（7世紀中頃）、推定金堂が造営され影向寺が創建された時期（7世紀後半）、塔が建立された時期（8世紀前半）、推定金堂が改築または改修され伽藍整備が進んだ時期（8世紀中頃）、武蔵国府が管理する瓦窯製の瓦で建物の補修が行われた時期①（8世紀後半）、武蔵国府が管理する瓦窯製の瓦で建物の補修が行われた時期②（9世紀後半～10世紀初頭）という変遷を辿ることがわかっています。この9世紀後半～10世紀初頭の補修については、『日本三代実録』や『類聚国史』といった歴史書に載る、878（天慶2）年９月29日に起こったとされる「相模・武蔵地震」との関連が推測されます。この地震では、相模国・武蔵国とも多くの建物が倒れ、人々が圧死したほか、相模国分寺は本尊等が破損して、その後の火災で焼失してしまったこと等が記されていることから、おそらく影向寺もかなりの被害を受けたことが想像されます。この地震の後、復興のために修理を行っていた証拠として、この時期の瓦が出土していると考えられます。

しかし、影向寺では、発掘調査で10世紀初頭以降の資料が発見されたことがなく、また文献資料なども乏しいことから、11世紀後半に現在の本尊である薬師如来座像（国重要文化財）が製作されるまでの約200年間についての詳細は全く分かっていません。ただ、現在の影向寺には 11 世紀後半製作の薬師如来座像よりも古い様相をもつ破損仏が2躯伝わっていて、この破損仏が「相模・武蔵地震」後の復興時に製作された本尊であるとすれば、地震後の10紀前半～11世紀後半に古代の瓦葺建物が失われた際に、この本尊も破損したため、新しい本尊として現在の薬師如来座像を製作し、瓦葺建物が建っていた場所に仏堂的な建物を建てて祀っていたと推測することも可能といえます。現在の本尊が製作された後は、影向寺の縁起によると、1358（延文3）年に新田義興等が挙兵した際に影向寺が戦火に巻き込まれ、寺の建物等が焼失したと記されていることから、本尊である薬師如来座像は無事であったものの、古代の瓦葺建物が失われた後に建てられた建物は失われたものと思われます。その後は、1406（応永13）年に影向寺伽藍再興の勧進を行ったことが、深大寺の僧長弁の『長弁私案抄』に載っていることから、15世紀初頭には復興されたと思われます。さらに、戦国の世も乗り越え、近世に入った 1694（元禄7）年に現在の本堂である薬師堂が建てられ、創建から 1,300 年以上もの長きにわたる法灯が受け継がれている、非常に貴重な存在です。

写真１　現在の影向寺(薬師堂)

このように、遺跡は、今を遡ること 1,300 年以上前に荘厳な古代寺院が造営されたことを知ることができるとともに、中世以降も続く影向寺の歴史を明らかにするうえでも重要な遺跡といえます。ただ、まだまだ解明できていない部分も多くあることから、今後も影向寺遺跡について調査・研究を進めていきたいと思います。　（つづく）

シリーズ
「麻生の歴史を探る」　第75話

徳川入府（1）～土農分離

小島　一也（遺稿）

徳川家康像（狩野探幽画、大阪城天守閣蔵）

北条氏が小田原を開城し滅亡したのが天正十八年（1590）七月。翌八月には徳川家康は関八州の領主として、三河以来の譜代家臣に護られ中原街道を小杉の渡しから江戸城に入っています。この北条傘下の江戸城の落城は五日だったと言われ、それから僅か3ヶ月、秀吉、家康間の予定の行動で、俗に「御打入り」と呼びますが、道中小机城を主郭とする都筑、橘樹の各城は遮る者とてなく（在地土豪と小机衆の対立があった）、難なく江戸城に入城しています。

北条氏と徳川氏の領国支配の違いは、譜代家臣の違いで、徳川氏の場合は三河以来の家臣団を持ち、一方俄大名の北条氏は臣従する家臣が少なかったことにあります。北条氏に属したこの地方の武士たちは、「とりあえず所領が安堵されれば」と従属していたもので、それを知る家康は小机城をはじめ各城を廃城とし、代わって三河以来の股肱の臣を支配者に任命、そして後に徳川恩顧の武士に知行地を与え村の領主とし、徳川300年の基礎を作っていきます。

家康の江戸城入府は天正十八年、天下統一を成し遂げた秀吉は「刀狩り令」を全国に公布、続いて兵農分離の施策を進めます。慶長三年（1598）秀吉が没し、慶長八年家康は江戸幕府を開きますが、士農工商の身分施策は更に進み、全国の土地は天領（幕府領）、寺社領そして、大名・旗本領に分けられ、それぞれが徳川家臣の知行地として収攬されていきます。

このことは戦国以来、農地を耕しながら戦をしてきた土豪にとっては大変な改革で、その多くは田畑は捨てきれず、刀を捨てて村の庄屋、名主などになっていきますが、小田原北条が滅びて江戸幕府が誕生するこの間約10 年余、この地の村々には村の基盤を揺るがす地殻変動が起きていました。

この時代、麻生周辺の土豪の去就を新編武蔵風土記稿で見ると、橘樹郡菅村の項に、百姓定右衛門・定四郎の欄があり、これは前項小沢城の城主佐保田山城守の子孫が農民となったもので、菅村では15家（15苗）の地侍が刀を捨て、農民となり、定右衛門が名主となったと記しています。高石村の欄には、名主兵右衛門の先祖は世々当所の郷士で吉沢民部と称し、その家伝には藤原姓とありますが、天正の頃に百姓となり名主を勤め、寛文年間（1661～72）には地頭となったとしています。また百姓孫右衛門の祖は小机城の家老笠原氏の庶流でこの地に土着、刀を捨てたとあります。百姓長兵衛の祖は石塚氏で、天正の頃の水帳には右近とあり、佐竹氏の末流とされ、さらに百姓甚蔵の祖も佐竹氏末流の木下四郎左衛門と称する地侍で、ともに徳川入府の頃に農民になったと述べられています。細山村の欄には、「御打入（徳川入府）後、土方・白井・三輪・宮田と云える者ども荒野を開墾し‥‥」とあって、「百姓佐兵衛、土方を氏とす、先祖を蔵人という文禄（1592～5）の頃の人」と紹介されていますので、この地では土方蔵人を筆頭とする郷士4苗が文禄の頃に百姓となったことがわかります。

新編武蔵風土記稿には旧柿生村の旧家について記載がありません。これはこれからの私どもの課題としておきます。第71話で述べた鎌倉時代からの御家人大曾根氏（寺家町）について新編武蔵風土記稿は、旧家百姓源右衛門の欄に「祖を大曾根と云う‥‥、中頃没落し金子と改む、今元に復して大曾根と云う‥‥」とあり、寺家・鴨志田村の名主を勤めています（現寺家ふるさと村四季の里にミニ資料館あり）。また、前稿（74話）沢山城の三輪・大蔵村の領主市川加賀守定友は北条氏滅亡後の天正十九年、武士を捨て農民として生き延びることを選び、現町田市大倉町関山の円光院（廃寺）跡地に歴代子孫の墓、五輪塔を残しています。

吉沢民部家墓　－高石・潮音寺－

市川加賀守家墓地　－大蔵・円光院跡地－

参考資料:「新編武蔵風土記稿」「川崎市史」「わが町　大蔵」「中里村郷土史」

シリーズ
時間と時計の話 第2部

時計と時間の観念（10）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆川越の「時の鐘」と内池武者右衛門◆

内池武者右衛門の話を続けましょう。攘夷論の高まりの中、アメリカ兵から懐中時計をもらったなど、誰にも言うことは出来ません。ですから武者右衛門は家族にも話さず、大事に隠し持ったまま時を送りました。やがて日本は開港し、欧米諸国とどのように付き合うべきかを巡る大論争を経て、徳川幕府が倒れ明治新政府が誕生したのは、武者右衛門の武勇伝から 22 年後の事でした。

19 世紀中ごろの懐中時計

新河岸川の水運に恵まれた川越藩は、北関東地方の諸藩の物産を江戸へ運ぶ要路にあり、幕府の信頼厚い譜代大名が治めていましたから、当然藩主や藩士が明治新政府に官吏として採用される見込みはありません。明治4年（1871年）の廃藩置県によって藩は解体、仲間の藩士たちと共に武者右衛門もまた、武家懐柔策として新政府から支給される僅かな家禄に頼るしかない失業者となったのです。

新政府の財政事情が苦しいことは、元川越藩の官吏として働いていた武者右衛門たちには察しがつきます。家禄もその内打ち切られるかもしれない。こう考えた武者右衛門は、これから何をなすべきかのヒントが得られないかと、新時代の先頭を行く横浜を訪れ、新しい時代の動きをつぶさに見学したのです。この地で髷を下ろすことを決意した武者右衛門は、1軒の西洋式散髪所を訪れ、さっぱりと髷を下ろしたのです。その散髪所で武者右衛門が眼にしたのは、次々に客が出入りする西洋式散髪所の繁盛ぶりでした。

元来手先が器用だった武者右衛門は、散髪なら自分にも出来そうだと見込みをつけ、川越で最初の西洋式散髪所を始めようと決意を固め、店の主人に頼み込んで、散髪の手ほどきを受けたのです。こうして散髪技法を学んだ武者右衛門は、国元へ戻って、ねらい通り川越で第1号の西洋式散髪所を開業したのです。この目論見は見事に当たり、内池理髪店は大いに繁盛したのです。明治政府が暦法を太陰暦から太陽暦へ、時刻制度を不定時法から定時法へと改める布告を発令し、ただちに実行に移したのは、こんな時でした。

当然各地の時の鐘も、新しい時刻制度で時を打たねばなりません。地方の小都市には諦めて時を告げることをやめてしまったところもありますが、入間県の県庁所在地ともなるとそうはいきません。市内に誰か懐中時計を所持する人物がいないか見つけるようにと、県令の厳命がくだります。困り果てた県の役人の1人が、一休みを兼ねて武者衛門の西洋理髪店を訪れ、ふと思いついて店主の武者右衛門に、「お客さんの中に、懐中時計を持っていると自慢していた人はいないかね。時の鐘を打つのに必要なのに、知り合いには1人もいなくてね……。」と尋ねてみたのです。ヴィンセンス号の乗組員から贈られ、大切に隠し持っていた武者右衛門の懐中時計が日の目を見る時がやってきたのです。「懐中時計なら、私が持っています」と答えた武者右衛門は、大切に隠し持っていた懐中時計を役人に見せます。狂喜した役人は、ただちに県令に報告し、武者右衛門は翌日早々に役所に招かれ、県令と面談することになったのです。

面談の席で県令は、武者右衛門を「時報の管理主任」に任命し、西洋理髪店の仕事を続けながら、現在も残る「時の鐘」（当時は多賀町の鐘つき屋敷と呼ばれていました）を、朝6時、昼12時、夜6時の3回撞くようにと指示したのです。こうして武者右衛門は、西洋理髪店の店主兼入間県の官吏となったのです。兼業の官吏という特別待遇が用意されたのです。武者右衛門の月棒は4円でしたから、兼業を禁じられた普通の役人の月棒に比べると2円ほど安かったのですが、彼の本業は理髪店主なのですから、これは割の良い仕事でした。こうして一躍時の人となった武者右衛門は、川越の有名人となり、彼の西洋理髪店には、大勢の客が訪れるようになり、大変繁盛したと伝えられています。西洋式散髪所に狙いを定めた武者右衛門には、時代の風を読む確かな眼があったのですね。

上空から見た日銀　円の字がくっきりと…

最後に当時の1円の価値は、現在価値に直すといくらぐらいになるのかを記して、本論に戻ることにしましょう。この点については諸説あるのですが、当時も今も流通している日本人の主食、米の値段で比較してみましょう。これは明治9年の記録ですが、当時米 10kg は 33 銭と記録されています。現在の米 10kg は東京の標準米価格で 3,500 円程度ですから、当時の 1 円は、現在では 10,600 円程度と考えられます。時報の管理主任の月給は、およそ 42,400 円程度だったと考えられますが、学者によっては、1 円の現在価値を 2 万円程度と考える方もおります。　（続）

川崎市立日本民家園に移された麻生の歴史３
金色姫伝説（こんじきひめでんせつ）

第102号でご紹介した旧岡上村蚕影山祠堂の宮殿を飾る4枚のレリーフ調彫刻にまつわる伝説です。

主人公の金色姫は天竺の旧仲国王の姫として生まれましたが、生母の王妃亡き後に迎えられた継母に憎まれ、様々な危難にあわされます。

最初に獅子の群がる山奥に捨てられますが、獅子は襲うどころか背に乗せて王宮に送り届けます（図1）。今度は鷹の集まる山に捨てられますが、鷹狩りに来ていた国王の家来たちによって助け出されます（図2）。さらにくり舟に乗せられて離れ小島に流されますが、漁師に救われて三度帰り着きます（図3）。そしてとうとう王宮の庭に生き埋めにされてしまいますが、庭から放たれる金色の光を怪しんだ国王によって掘り出され助かります（図4）。

姫の身を案じた国王は、姫を桑の木のくり舟に乗せて大海に逃がします。姫は神仏の加護により、常陸国豊浦湊に流れ着き、浦人に助けられ、養われましたが、病にかかって亡くなってしまいました。

ある夜、浦人の夢枕に姫が立ち、「馬鳴菩薩の化身である私に食を与えてくれればご恩返しができます」と告げました。そこで棺を掘り起こしてみると、中に姫の亡骸はなく、代わりに小さな虫がいました。そこで、食物として桑を与えたところ成長していき、4回の休眠を経て、繭になりました。この4回の休眠は生前の姫の4回の苦難を乗り越える旅です。こうしてもたらされた繭から生糸そして絹が生まれ、豊かさがもたらされました。

筑波山麓にある蚕影神社はその金色姫を祀り、岡上の蚕影山祠堂はそこから分祀したものです。

図1．獅子の谷

図2．鷹の山

図3．丸木舟

図4．王宮の庭

柿生郷土史料館催物案内　【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

2月　4・11・18・25日（毎土曜日）　**3月**　5・12・19・26日（毎日曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時

第66回 カルチャーセミナー　王禅寺の魅力

『名刹　王禅寺』を著し、今まで誰も手をつけなかった王禅寺の歴史に手を染めた三輪先生に、中世中･後期から現在に至る王禅寺の歴史を中心に、関東の高野山とも呼ばれる名刹王禅寺の魅力を縦横に語っていただきます。

講師：三輪修三氏　（郷土史研究家）

日時：3月26日（日）　13時30分～　　会場: 柿生郷土史料館特別展示室

第67回 カルチャーセミナー　国史跡･奈良時代の役所と寺院

川崎北部の遺跡発掘調査を、長年に渡って担当された村田先生に、その発掘の成果を踏まえて、武蔵国、橘樹郡衙の所在とその概要、さらには、関連施設でもある影向寺の姿、そこに生活した人々の精神世界にまで、踏み込んでお話し下さいます。

講師：村田文夫氏　（川崎市民アカデミー副学長）

日時：4月15日（土）　13時30分～　　会場: 柿生郷土史料館特別展示室

柿生文化原稿募集

柿生郷土史料館では機関紙「柿生文化」への掲載原稿を募集します。身近に眠っている郷土の歴史･民俗･文化等をご紹介いただければ幸いです。詳しくは、下記またはHPお問い合せへご相談ください。

- ◆ 全面記事：1,600字程度＋写真、図
- ◆ コラム：600字程度＋写真、図

問い合わせ先：有泉（柿生文化編集担当）
090-7630－4775